

大学間連携を活かした国内観光実習の取り組みと成果
：2016年度共同研究報告として¹

**Domestic Field Study Program on Tourism Utilizing Inter-University
Cooperation: A Report on the 2016 Tama University Joint Research
Project**

田中 孝枝

Takae Tanaka

要旨：本報告は、2016年度夏期に多摩大学グローバルスタディーズ学部の2年生以上を対象として、沖縄県において実施した国内観光実習科目についてのものである。本実習は、2016年度共同研究費の助成を受け、ホスピタリティ・マネジメントコースの専門科目として、公立名桜大学の協力のもと実施された。本実習科目において、履修学生には主体的に学ぶ姿勢が見られただけでなく、自らの体験を通じて問いを深めようとする姿勢が見られた。また、実習の実施が大学間連携を促進する役割も果たした。

キーワード： 国内実習、観光、大学間連携

Abstract: This report summarizes the objectives and outcomes of the domestic field study program on tourism offered as a specialized subject in a hospitality management course for second, third and fourth year students in the School of Global Studies, Tama University, in the summer of 2016. This program was conducted in collaboration with the public Meio University (Nago City, Okinawa Prefecture) as part of an inter-university cooperation relationship. Based on this field study program, students actively developed their own learning attitudes, and deeply explored questions raised by their own experiences in Okinawa. Moreover, this program effectively promoted cooperation between the two universities.

Keywords: domestic field study program, tourism, inter-university cooperation

1. はじめに

本報告は、2016年度夏期に多摩大学グローバルスタディーズ学部の2年生以上を対象として、沖縄県において実施した国内観光実習科目についてのものである。本実習は、2016年度共同研究費の助成を受け、ホスピタリティ・マネジメントコースの専門科目として、公立名桜大学の協力のもと実施された。公立名桜大学は沖縄県名護市に位置し、2016年1月に本学と学術交流及び連携に関する包括連携協定を締結している。

観光を学ぶことの目的は、観光産業の構造について知るだけでなく、それぞれの地域における歴史・文化的文脈において、建造物や風景、食事、芸能などを理解する力「観光リテラシー」を身につけることである（高山 2017）。つまり、世界には多様な歴史や文化、価値観があることを理解し、自文化を相対化する視点を身につけることが、観光を学ぶ意

義の一つである。

また今日、観光は単なる「遊び」ではなく、少子高齢化や過疎化、コミュニティの解体など、地域の課題解決の一つの手段として重要な役割を担うようになっている。地域の抱える課題は多様で複雑化しており、それに対する観光の作用の仕方も様々である。そのため、地域活性や地方創生の成功事例を知るだけでは十分でなく、その背景にある地域の歴史文化に触れ、地域によって異なる観光産業の成り立ちや位置づけを理解したうえで、課題解決の手段としての観光の機能を学ぶことができるのである。

以上の観点から、観光を学ぶうえで自らの住まう地域について学ぶだけでなく、国内外問わず他者の住まう地域を訪れて学ぶ機会が必要であり、実習科目の果たす役割は大きい。本学部では、2015年に藤沢市・藤沢市観光協会と観光連携等協力協定を締結し、藤沢において積極的な教育研究活動を行っている。これは、学生にとっては自らが住まう地域について学ぶ場となる。それに対して本実習は、沖縄県という自らの住まいとは離れた地域へ赴き、視野を広げる機会を提供しようとするものである。

2. 実習の概要

本科目の到達目標は大きく次の三つとした。(1) 沖縄の文化や歴史について講義および実習をとおして理解を深める、(2) 沖縄の観光産業の現状について講義および実習をとおして学ぶ、(3) セーリング競技のルールや、オリンピックなど大規模国際イベントの運営について入門的な講義を受ける。これは、2020年の東京オリンピック・パラリンピックでは、藤沢市江の島でのセーリング競技開催が決定しており、本学部学生が準備・運営にボランティアとして関わることが期待されているためである。

本実習の履修者は19名で、4名の教員が引率した。履修者は、事前指導を受けた後、2016年8月21日～26日の5泊6日的那覇市および名桜大学(名護市)を中心とした実習に参加し、事後指導として個人発表およびレポート提出を行った。個人発表の成績優秀者6名は、11月12日の本学部学園祭において代表者としてプレゼンテーションを行った。

事前指導では、沖縄の基本的な地理を頭に入れるとともに、米軍基地の現状や日本と中国の間で文化を育んできた琉球王国の歴史などを講義した。また、事前に実習行程を把握させるため、訪問地について調べてまとめる課題を出した。さらに、講義で学んだことや訪問地について調べた内容をもとに、実習後に作成する個人発表・レポートのテーマを決め、調査項目を考えて参考文献を調べるとともに、各自自由に課題に取り組む実習最終日の行程を計画した。

沖縄での実習では、嘉数高台および普天間基地の展望、首里城、ひめゆりの塔・平和祈念資料館、沖縄県営平和祈念公園、斎場御嶽、古宇利島、美ら海水族館、辺野古基地移設予定地、中城城を訪問した。名桜大学では、生涯学習センターを利用してセーリング、沖

縄観光、イベント&コンベンションについての講義を受けた。セーリングの授業では、江の島で開催されるセーリング競技の基本的ルールや艇種を学ぶだけでなく、実際に陸上でヨットに触れ、風を受けた際の帆の重さなどを体感することができた。5泊の行程のうち、3泊は那覇市、2泊は名桜大学に宿泊した。

3. 実習の成果

3.1 学習効果1：主体的に学ぶ姿勢

本実習の大きな学習効果の1つは、学生の主体的に学ぶ姿勢を引き出すことができた点である。事前指導のなかで、実習後の発表・レポートのテーマを考え、調査計画をたてたことで、単に与えられた観光ツアーに参加しているような態度ではなく、それぞれの訪問地で自身の調査課題と真剣に向き合おうとする姿勢が見られた。特に、ひめゆりの塔資料館や平和祈念公園では、熱心にメモをとりながら参観する学生が多く、当初予定していた滞在時間では不十分だとして、学生から滞在時間延長の希望が出たほどであった。

また、学生が事前に設定した調査課題は、沖縄戦争の歴史や米軍基地への住民意識、沖縄の民族意識、美ら海水族館の事業戦略、那覇市のインバウンド観光対応など、テーマが多岐に及んでいたため、学生同士でそれぞれの課題について議論し合うような場面も見られた。学生たちは、夜の自由時間でさえ、国際通りで出会った人々に米軍基地についての考えや本土とは異なる沖縄意識について聞き取りをするほどの熱心さであった。最終日は、各自が調査課題をさらに深めるための時間として行程は自由であったが、あいにく途中から大雨が降る天気となった。しかし、それにも関わらず、那覇市歴史博物館や普天間基地など、事前に予定していた調査地へと赴き、情報収集をしてきた学生も少なくなかった。

事前に各自が調査課題を設定したことで、実習への参加目的が明確になり、学びへの主体性を引き出すことができたと考える。そして、自分に適した調査テーマを明確化することができれば、その後は引率教員の側が驚かされるほど能動的に課題に取り組む学生の姿が印象的であった。

名桜大学での講義についても、普段とは異なる教室環境や教員から刺激を受け、熱心に受講する学生が多かった。また、沖縄観光の歴史や現状について講義を受けた後に、かつて海洋博の舞台となった地である美ら海水族館へ行くなど、講義内容がすぐに現実と結びつくような場面も多く、このとも主体的な学習姿勢を引き出すことにつながった。

今回は、名桜大学の入試期間と重なったことなどから、学生同士の交流の時間をとることができなかったのが残念であった。しかし、学生たちは、名桜大学の生涯学習センターに宿泊したため、夜間に大学施設内でエイサーの練習をする名桜大学の学生たちと交流することができたという。このような機会を自発的に切り開いてくれたのは嬉しいことであり、名桜大学施設を利用したことで生まれた一つの効果であった。

3.2 学習効果2：自らの体験をとおして問いを深めようとする姿勢

本実習では、各学生が訪問先にて主体的に行動し、積極的に観察・聞き取りを行った。そして、自ら目にしたこと耳にしたことをもとに、実習後の発表・レポートをまとめたため、問題関心と主張の明確な報告が多かった。先述した本科目の3つの到達目標に照らして整理すると、学生の提出課題タイトルは以下のとおりである。

(1) 沖縄の文化や歴史

- ・ 首里城と琉球王国
- ・ 琉球と中国そして沖縄
- ・ 沖縄人の民族意識
- ・ 琉球民族と現在の沖縄
- ・ 沖縄の終戦前と終戦後
- ・ 沖縄県平和祈念公園及び平和の礎・慰霊塔について
- ・ 沖縄と米軍の関わり、環境破壊
- ・ Okinawa Military Base
- ・ 沖縄の米軍基地
- ・ かりゆしウェアでわかること
- ・ 沖縄の子供の貧困

(2) 沖縄の観光産業の現状

- ・ 沖縄のインバウンド対策について
- ・ 沖縄県が外国人観光客に対して行っていること
- ・ ひめゆり平和記念資料館～観光の観点からみた資料館について～
- ・ 美ら海水族館と他の水族館の比較
- ・ 美ら海水族館のおもてなし
- ・ 美ら海水族館～実際に行って、見て、感じた（こんなだったらもっといいのに）～

(3) セーリング競技のルールや、オリンピックなど大規模国際イベントの運営

- ・ 直接該当するテーマはなし

どのテーマも、学生が現地で体験したことがベースになっており、内容もバラエティ豊かなものである。(1) 沖縄の文化や歴史では、大きく分けると沖縄独特の文化や民族意識について、沖縄戦とその後の米軍基地への人々の意識についてという2つのテーマがあった。首里城や斎場御嶽で見聞きした琉球王国の歴史や現在の沖縄で感じられる「中国」的要素とそのルーツについて探求したもの、実際に現地で出会った方から自分たちが「本

土の人」や「内地の人」と呼ばれた経験をきっかけに沖縄人意識を議論したもの、現地で出会った方から「今のエイサーは観光用のもので、本来のものとは違う」という話を聞き、琉歌のルーツについて調べたものなどもあった。また、米軍基地についても、現地の方に聞き取りをし、「本土ではニュースになっていないような事件もたくさんある」といった話を聞き、沖縄に住む人々の基地認識を考察したものなど、いずれも自らの体験をとおして「気づき」を得て、それを問題設定の柱として問いを掘り下げている。

(2) 沖縄の観光産業の現状についても、大きくは2つのテーマがあった。1つはインバウンド観光対応、もう1つは日本トップレベルの入場者数を集める美ら海水族館の経営・サービス戦略についてである。インバウンド対応については、実習の訪問地でどのようなインバウンド対応がなされているかをスタッフの方々に聞き取りしたり、実際にそこを訪れている外国人観光客の様子を観察したりするなどして、その対応を比較していた。美ら海水族館についても、単に観光客として楽しむだけでなく、そこを管理運営する側の視点、或いはそこを訪れる外国人観光客や高齢者などの視点で水族館を捉え、改善に向けた提案をする報告であった。また、ひめゆり平和祈念資料館についての発表は、ダークツーリズムの観光資源として戦争資料館を位置づけようとする意欲的なものであった。こうした視点も、資料館の案内所の方に外国人観光客が来訪するかを尋ねた際、アメリカ人はわざわざ訪問する人もいるが、中国人は何か観光地があると思って入って来てても入場料がかかることもあり、中に入らず帰ってしまうことが多いという話を聞き、観光資源としての資料館のあり方について考えたという。

(3) のセーリング競技のルールや、オリンピックなど大規模国際イベントの運営について直接的なテーマ設定をした学生はいなかったが、名桜大学でのセーリングの授業、特に陸上ではあるが実際にヨットに触ることのできた経験は印象的だったようである。本学部と藤沢市・藤沢市観光協会との様々な取組みについて読売新聞から取材を受けた際、本実習に参加した学生も取材を受けたのだが、セーリングの授業について「体だけでなく、風を読むために頭も使うスポーツなのだと印象が変わった」、「サーフィンをするので自分もしてみたい」といった感想が述べられた(読売新聞 2016年11月11日朝刊)。江の島がセーリング競技の会場になるとはいえ、競技自体への関心が高いとは言えない現状であるが、マリンスポーツに慣れ親しんできた学生も一定数おり、名桜大学でのセーリングの授業は、学内で東京オリンピック・パラリンピックへの気運を醸成する一助となった。

以上のとおり、担当教員が想像していた以上に、学生たちは主体的に自分の設定した調査課題と向き合い、現地で出会った人々への聞き取りや観察を含め、情報収集を積極的に行った。その結果、新たな「気づき」を得て、自分の問いをさらに深めていくことのできた学生が多かったことに、実習科目の意義を改めて感じさせられた。

3.3 大学間連携の意義

名桜大学との大学間連携を利用した意義は大きい。普段の生活圏を離れて沖縄を訪れる本実習において、協定先の名桜大学は沖縄の良き「仲介」であった。学生たちは、他大学の施設で他大学の教員から授業を受けることで、平常の授業とは異なる刺激を受けることができた。特に、近隣出身学生が多く、かつ少人数制という環境で過ごす本学部の学生にとっては、沖縄の名護市に位置し2000名程度の全国から集まる学生を抱える名桜大学への訪問や学生との交流は、それだけで自己を相対化するための一つの体験となる。また、単に沖縄の観光地を訪れるだけでなく、現在は名護市の住民でもある名桜大学の先生方から沖縄に関する講義を受けることで、より深い学びの場を得ることができた。

さらに、実習をとおして名桜大学と本学教職員の相互交流が進んだことも大きな成果である。その後、2017年2月に藤沢市で実施された「多摩大学 藤沢市市民講座」には、名桜大学から2名の教員を招いて藤沢市の観光について議論するなど、地域貢献を合わせた学術交流が展開している。地域の抱える課題が複雑化するなかで、それぞれの課題解決において観光がどのような役割を果たすかという問いに大学が応えようとするとき、そこでは一地域にとどまらない大学間連携と通した学術交流が大きな意義を持つこととなる。

4. まとめ

2016年度共同研究費の助成を受けた今回の国内観光実習の取組みでは、学生への学習効果においても、大学間連携の促進においても大きな成果を得ることができた。学習効果としては、実習科目の事前事後指導の重要性を改めて確認した。事前指導において学生に実習参加の目的意識を明確に持たせることにより、主体的な学びの姿勢を引き出すことができた。それは学生個人の学びだけでなく、学生同士の学びにも繋がることが分かった。これは、実習の学習効果を何倍にも高めるものである。また、学外での実習は社会的マナーを身につける場でもあり、事前指導は実習前に学生と顔を合わせ、「多摩大学の学生」として学外へ出る自覚を持たせるためにも有効であった。

事後指導においても一定の成果提出を求めることで、実習中に自らが体験した「気づき」を、文献研究と合わせて深めていくことができた。学生の提出した課題の多様なテーマからは、観光というタイトルで行われる実習が、単なる観光客としての遊びや観光実務の現場を知ることだけにとどまらないことが明らかになった。それは、各地域の観光資源をとおして他者の歴史や文化に触れ、自己を相対化する契機をつくるとともに、観光対象を管理・運営する側、或いは観光地の住民といった、多様な人々の視点で観光を捉える想像力を養う一助となる。本報告の冒頭で述べた、観光リテラシーを身につけ、個別具体的な地域において観光を多角的に捉える訓練をするという観光実習の意義を十分に果たせたものと考えている。

ただし、今後の課題もある。今回は、レポート提出にあたり論述調の文章の形式、参照の方法や参考文献の書き方など、執筆の細かい指導をすることができなかった。その結果、個人発表の際に利用した発表原稿をそのまま提出したようなレポートも少なくなかった。履修学生の学習効果をさらに高めるためには、レポート執筆について指導し、最終提出されたレポートをまとめた実習報告書の作成を行うことも検討できる。

大学間連携に関しては、名桜大学の施設を利用し、先生方にご講義いただいたことで学生の学習効果を高めることができたのはもちろんのこと、実習をとおして両校教職員の交流を深めることができた。地域の抱える課題が複雑に絡まり合う今日、地域に縛られない越境的なアプローチこそが大学の一つの意義であり、それは地域を越えた大学間連携によっても推し進められるものであると考える。

注

¹ 本報告は、2016年度共同研究費「名桜大学および那覇市における研修をとおした高度な『おもてなし力』育成プロジェクト」の助成を受けたものである。

参考文献

高山陽子編著 (2017) 『多文化時代の観光学—フィールドワークからのアプローチ』ミネルヴァ書房
読売新聞 (2016年11月11日朝刊) 「五輪へ 外国人客にアンケート」

Received on 31 December 2017